

PICK UP MOVIE

『戦雲』

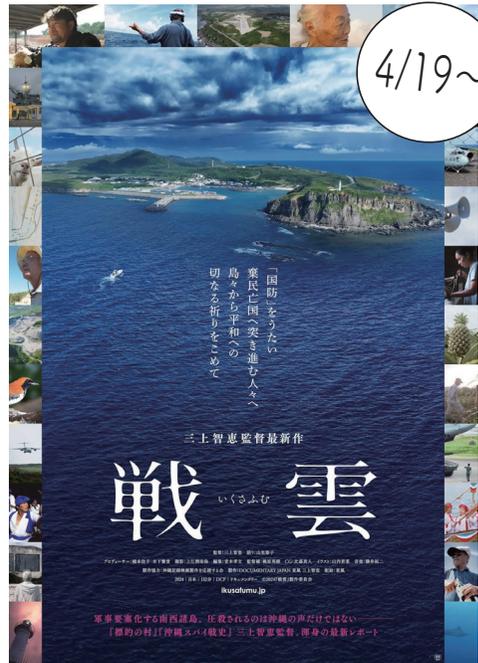
【2024年／日本／132分】

監督：三上智恵 語り：山里節子

プロデューサー：橋本佳子、木下繁貴

(C) 2024 『戦雲』製作委員会

日本は 戦争をする国に なっていくのか



与那国島や宮古島に住む知人たちから、自衛隊が来るなどの話は聞いていた。だがこの映画を見て、こんなひどい状況になっていることに愕然とした。マスコミはそれをほとんど報じない。それで三上智恵監督は止むに止まらずこの作品を作ったという。

タイトルの「戦雲」は、戦争の到来を告げる不吉な雲のことだ。石垣島、宮古島、与那国島に自衛隊基地や弾薬庫や訓練場がたぎつぎに作られていく。住民投票実施や事前説明を求める人々を無視して、計画は無理矢理に進められる。沖縄戦を経験した人々の上にまた戦雲が湧き起こっている。いや、いまや戦雲は日本全体を覆っているのだ、とこの映画は警告している。

穏やかな島には不似合いな自衛隊施設ができる。すると次には港や基地前に座り込む人々を踏みにじって、ミサイルが持ち込まれる。戦車が街を走るようになり、自衛隊と米軍の共同演習が始まる。国の安全を守るという大義名分のもと、南西諸島の人々に過大な犠牲が強いられる。いや島の人だけにとどまらない。「いのちと暮らしを守るオーバーたちの会」の山里さんは、基地ゲート前で若い自衛隊員に呼びかける。「列強国同士のケンカで、なぜ私たちが苦しまなければならないのか。あなたたちも早く迷彩服を脱ぎなさい」と。

けれどそんな苛酷な現実の一方で、画面には自然豊かな島々や大海原で働く人、伝統的な祭りに興じる人たちがたくさん登場する。そうした暮らしのなかで、一人一人が自衛隊基地をどう考えどのように行動したのかを、長い時間をかけて生き生きと描き出しているのが、この作品の大きい魅力のひとつだ。生活の周りには、ヤギ、牛、馬などがいて、苦勞して開墾した農地が広がる。黒カジキをはじめ海の幸も豊富だ。だが軍事基地や弾薬庫があるせいで、そこは真っ先に攻撃の対象となり人々を危険にさらすのだ。

国防を掲げる国がいかに住民を軽視しているか。それが如実に現れた出来事があった。与那国島はいつの間にか国から「島外避難区域」に指定され、政府の指示ひとつで全島民が1日で島外に避難しなければならなくなった。だが示された避難先や避難方法は実態にそぐわないいい加減なものだ。牛を置き去りになどできないという牧畜業者の小嶺さんは、「与那国島の人々の命は日本で一番軽んじられている」と憤る。

思えば日本政府は、じわじわと防衛費を増額し、最近ではついに殺傷能力のある次期戦闘機の輸出解禁に踏み切った。さらに海自はトマホークの攻撃目標を米軍と共有するとまで言い出した。平和を守るために外交努力よりも軍備拡充に重きを置く国の動きを、座視してしまったのは私たちが。沖縄や南西諸島に過大な負担がかかっているのに気づいても、多少の犠牲は仕方ないと、心のどこかで思っていたのは私たちが。では私たちは何をすべきか。重い問いを投げかけられる映画だ。

プロフィール

田村志津枝

：ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977年にファスピンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からホウシャオジエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。